

こうして自分の気になっていく場面を書き出してみたら、もしくは、書きながら、おそらく多くの人はあの子はどうしよう…と考えると思います。そして、もしかしらうだからじゃないか、と思いがたります。

葛藤、モヤモヤ…自分の思いを書く
 聴覚障害児教育に長く関わってきた竹沢清さんは、実践記録の書き方について、実践の中で自分の葛藤（矛盾）を書くことが大事だと指摘しています。自分が気になって仕方のないこと、葛藤していることを中心に置くのです。ずばり「私は」という主語を入れて教師の思いを書くことが大事なのです。とても気になっている、あの日のやり取り。ずっとモヤモヤしている…ということを書き出してみます。書くこと、少し気持ちが楽になったりします。しかも、書いているうちに気持ちが動いてきて、モヤモヤしていたことを書いた後に、ほかのこと、別の思いに気がついたりします。書きながら、さらに気づきが広がっていくのです。

小学校3年生、「突然キレる」と言われていたゆうたくんが、たくやくんに暴言をぶつけていた時のこと。あまりにもキツイ暴言を吐いているので止めましたが、ゆうたくんは納得せず、怒りがおさまりません。たくやくんに「あやまれ！」と言っています。ただ、たくやくんに聞いても、ゆうたくんに何もしていない、と言います。周りの子に聞いてもそのようです。ゆうたくんに聞いても「ぶつかっただけ！」「あやまれ！」ばかりで、よくわかりません。何もなくて、こんなに怒るだろうか。何があったのだろうか…。

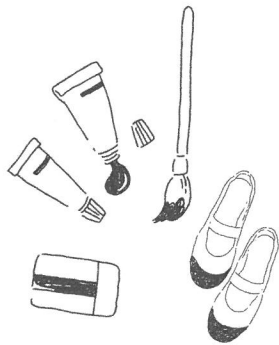
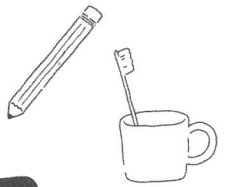
近くで何かあったのかもしれない。思い出してみると、その前に、けんたくんとたくやくんが、ちょっとぶつかってしまいました。二人とも、あまり気にしてはいませんでした。

ここから、さらに考えます。けんたくんは普段からゆうたくんとよく遊んでいて、二人は仲のよい友だちです。ゆうたくんがたくやくんにキレたのは、もしかしら、「たくやくんは、自分の友だちのけんたにぶつかっただけなのに、謝らなかつた」ことに怒っていたのではないか…。突然キレているわけではなく、実は友だちを

仲間の中へ…報告

こうして、自分自身がごくモヤモヤした実践場面について思い出したら、起きた事実と自分の仮説を合わせて、メモを書いてみます。そして、ぜひ身近な子どもの思いを理解しながら実践をしたと願っている仲間に話してみてください。

ねがい ひろがる 教育実践



神戸大学
川地亜弥子

かわじ あやこ / 研究テーマはわかる・楽しい・感動のある授業づくり、安心できる集団づくりについて。編著に『実践、楽しんでますか？—発達保障からみた障害児者のライフステージ』（クリエイツかもがわ）など。

第5回 実践報告・記録のねうち

いよいよ夏！ 夏といえば全障研大会。今年の静岡大会はなんと分科会もオンライン開催です。久しぶりにあの人と会えるかも、話せるかも…と楽しみにしている人も多いと思います。

今回は、実践を報告・記録することと、その意味について考えます。実践を報告・記録することは、実践すること、次の実践を構想することと深くつながっています。ただ、「今の職場は忙しくて、なかなかまとまった記録が書けない…」「次はあなたもぜひ実践報告してねと言われたけれど、どうやってまとめたらいのかわからない」という人もいます。大会に行つて「すごい実践報告に出会った！ 自分も何か報告してみたい」と思ったら、ぜひ今回の内容を思い出してください。

さて、毎日積み重ねていることを、すべて記録することはできません。何こそ報告・記録するべきか？ ぜひみんなと共有したいことを報告・記録する、というのはその通りなのですが、「みんな」として値打ちのあること…と考えると、とたんに報告がむずかしくなりがちです。ではどうすればいいのでしょうか。

大事に思つてキレているのでは…。こんなふうには、「何もないのにキレる」ということはないと思う」という自分の仮説から、さらに少し視野を広げ、考えてみると、「くから…だったのでは」という道すじが見えてきます。

「もしかしら…」「ちょっと変だ」という気づきは、最初は「主観」ですが、その気づきが起きた場面にぐっと焦点をあわせて、深めていくと、いくつも新しい気づきが得られることがあります。そしてそれが、今までのその子についての理解や、その時の状況、その時期の発達として立ち上がってきます。そして、その子自身がうまく言葉で説明できなくても、その思いをいろいろと想像することができます。